

CLC からしだね書店 便り



11 2021
November

CLC からしだね書店では…

- ① キリスト教書が中心ですが、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もたくさん揃えたいと思います。
- ② お洒落 でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。
- ⑤ 図書コーナーも併設予定です。ドリンクを片手に、お好きな本を手にとってお読みください。
- ⑥ 古書の販売も準備中です。
- ⑦ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。



『今さらながらのアベノマスク』と『生活保護』について考える

『護られなかつた者たちへ』

中山七里 著
草思社文庫



日本国憲法（昭和二十一年憲法）第25条第1項「すべて国民は、健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。
第2項 国は、すべての生活部面について、社会福祉、社会保障及び公衆衛生の向上及び増進に努めなければならない」

今回の読書感想本は、この憲法25条に保障された「生活保護」の在り方を取り上げたミステリーです。ざっとしたあらすじは、こうです。

震災四年後の仙台で、二人の男性遺体が見つかります。いずれも、じわじわと餓死していくという残忍な殺され方をしていました。しかもこの二人、周囲からの評判がきわめてよく、まじめで温厚、善人、人格者だったと、彼らの身近にいた誰もが口をそろえます。そんな人間がなぜ無残な殺され方をしなければならなかったのか？

やがて、この二人は同時期に同じ福祉保健事務所に勤務していたことがわかります。善人、人格者と言われていた彼らが、じつは生活保護申請に訪れた人たちの弱さや無知をいいことに、保護の申請を拒否したり、却下したりしていたのです。

物語は犯人と思われる利根青年を追う管籥刑事の目線で進行していきますが、同時に、利根と、利根が心を通わせていた老婆けいさん、母子家庭の男の子かんちゃんの日常が、物語のあちこちに散りばめられています。ひよんなことから出会った三人は、それぞれがさびしく、貧しく、世間から捨て置かれたような境遇でしたが、たがいに気遣い合い、助け合い、いたわり合いながら、まるで陽だまりのような数年間をともにしていたのです。けいさんの餓死という最悪の結末を迎えるまでは。

「健康で文化的な最低限度の生活」を守るために、国に課せられた義務と、その義務を執行するために行政に課せられた義務。管籥刑事は事件を追っていくなかで、国と行政がその義務に逆行するふるまいをしていたことに気づき始めます。

事件の背景にあるのは、個人的な恨みというよりは、もつと大きくて根深い日本という国の在り方そのものだったのです。（物語の結末は、わずかな希望の光を感じるものになっていますので、ご安心ください。）

さてCLCからだね書店は、障がいを持つ人たちが働く就労支援施設でもあります。そして相談者・利用者の中にも生活保護受給者はおられます。ですから、私にとってこの小説の軸になっている「生活保護」の問題は、とても身近なものでしたし、それなりに勉強してきたつもりでした。しかしこの小説を読んで、建前としての生活保護の理念・制度・仕組みと、生活保護の実態が、かなりずれてしまっているのではないかと疑問が大きくなりました。

小説はあくまでフィクションなので、たとえば、「福祉保健事務所」という名称は「福祉事務所」と読み替える必要がありますが、興味深いのは、小説の中に出てくる保健福祉事務所職員のセリフ（p.221）です。

「2006年5月、厚労省は全国の福祉保健事務所の所長を集めて会議を開きました。席上で示されたのは各自自治体間での生活保護利用率の比較です。人口や産業構造が同等な自治体を比べ、保護率が高い自治体は怠けていると名指しでこき下ろすんです。要するに吊るし上げ大会ですよ」

これは、2006年5月15日に実際に行われた「全国福祉事務所長会議」のことを指すようです。調べてみると、「生活保護の適正実施」という国、地方公共団体共通の課題や、母子世帯や障害者世帯など要援護世帯等への自立支援策の充実といった課題に対して、国の重点施策、福祉事務所の先進的取り組み事例の紹介を通して、全国の福祉事務所長が共通の認識を持ち、**創意工夫ある取り組みの促進に寄与すること**を「目的」に行われたという資料がネット上にありました。

ちなみに、生活保護は国の責任で行うべきもので、財源は3/4を国が、1/4を市などの地方自治体がもちます。さらに地方自治体負担の1/4もほぼ国からの地方交付税で賄われているので、実質は国が100%近くを負担していると言えます。

この時の会議資料には、「憲法の理念に基づいて、健康で文化的な最低限度の生活からこぼれ落ちている国民を見つけ出し、適正に保護費を支給しなさい」という積極的な意味の文言はどこにもありません。むしろ「保護の支給条件に1ミリのでも合わなさそうな人を排除することが、**適正実施**。何が何でも働くよう強要したり、縁切状態の家族を探し出して金銭援助させるよう指導するのが**自立支援**。福祉事務所は厚労省からのこの命令を**共通の認識**と心得て、**創意工夫ある取り組み**によって保護費削減の数値目標を立てて、それを達成しなさい」というのが、資料の裏に込められたこの「会議」の目的だと、福祉事務所側は絶望的なまでに、忖度して理解したのではないかと思われれます。

それはその後、実際に北九州市で起きた事件を振り返れば想像が付きまします。2007年7月、50代の一人暮らしの男性が生活保護を打ち切られ、生活に行き詰って、再度「保護を受けたい」と訴えたにもかかわらず放置され、「おにぎり食べたい」と書き残して餓死した事件です。そして、今もその流れはあまり変わっていないのではないかと思います。

ただ一方で、小説の中にも出てくるように、暴力団等による生活保護の不正受給があることも事実です。生活保護受給者の保護費を吸い上げてしまう自称「困窮者救援団体」もあります。私の知るところでは、道義的に不正受給と同じではないかというケースもありました。障害者手帳を持つ生活保護受給者に数百万円の遺産が転がり込み、いったん保護停止となったのですが、彼は生活保護の仕組みをよくよく心得たうえで、遺産を保護停止の1か月間で使い切った後、再びやすやすと保護を再開することになったというものです。

餓死する人がいる一方で、いとも簡単に生活保護を受給できる人がいるのはなぜか？

もし私が、保護費削減数値目標のプレッシャーにさらされたうえ、膨大な仕事量を抱えて疲れ切ってしまった福祉事務所のケースワーカーなら、なるべく「心を煩わさずに」「作業をこなしていきたくなる」と思います。公的な支援者がくついている障害者やお年寄りなどは簡単に通して、支援者がついていない人たちは、基本的に通さない方向で処理する。一人ひとりの暮らしむきや人生に心を寄せていたのでは身がもたないので、窓口に来た『人』を人ではなく『パターン』として捉え、パターンにあったマニュアル通りの断り文句で追い払う。自分の頭で考えたり感情を動かしたりしない。善人・人格者というプライベートな一面と、心をシャットダウンした仕事上の一面を使い分けて、なんとか自分を保っていく……。

あいつぐ災害、そしてコロナ禍で、日本は今、悲鳴をあげています。そんな中で、限られた税金をどう使うかは、大きな課題です。

今さらながらの話かもしれませんが、今年3月時点で、国が調達した「アベノマスク」の3割近い約8200万枚（約115億円相当）は配布されずに倉庫に保管されていて、保管費用がすでに約6億円もかかったとのこと。家庭や福祉施設に眠ったままのマスクの実費、配布に係った手間賃、送料を含めると、いったいあのマスクにどれだけの税金がつぎ込まれたのでしょうか。

私はその金額を知りたいです。安倍さん以外であの小さいマスクを装着した国会議員、厚労省職員、そして国民がどれだけいたのか、人数も知りたい。なにより、アベノマスクで使った（今も倉庫代に使っている）税金は、「おにぎりを食べたい」と書き残して餓死した人にとつての「おにぎり何個分」なのかを、ちゃんと知りたい。

この本は、殺人犯を追うミステリーではありませんが、私にとつてはもう一つ現実に起こっている「ミステリー」があることを教えられた小説でした。すなわち、誰も使う気にならないマスクを配布するなんておかしなことを誰がやろうと言い出し、厚労省職員たちも与党野党の政治家たちも、そして私たち国民一人ひとりも、誰もストップをかけられなかったのはなぜなのか？誰も知らないうちに、あのマスクにぎざぎざと税金がつぎ込まれることになったことと、福祉事務所の窓口で今も起こっていることと、10月31日の衆議院選挙が戦後3番目の抵投票率（55.93%）だったこととは、どこでどうつながっているのか？この謎に満ちたミステリーを解き明かしていくことが、一人の国民として、福祉の仕事に携わる者として、そして日本という国に生を与えられた一人の信仰者としての義務ではないかと思えます。

ちなみに、映画もとてもよかったです。ただ、映画は時間が前後して進むので、ちょっとわかりづらいかもしれません。小説を読んでからご覧になることをお勧めします。

【CLCからしだね書店 店長】

《お知らせ・1》

◆教会や保育園、幼稚園等で、定期刊行物や新刊書、用品等のご注文をある程度まとめて頂きましたら、月1回、無料の定期便でお届けします。

◆お近くにキリスト教書店が無い場合など、ご希望により、新刊書や用品(グッズ)の訪問販売を検討させて頂きます。ご相談ください。

◆再版発行のリクエストをお寄せください。絶版した良書で、再版してほしいものがありましたら、お知らせください。ある程度リクエストがまとまりましたら、出版社に情報提供したいと思います。

《お知らせ・2》

◆からしだねの「おすすめ本スポンサー」システム
◆あなたのイチ押しの本を、
◆店に置かせていただきます

「この本、ぜひ皆さんに読んでほしい」というあなたのおすすめ本。3か月間店頭においてみませんか？残念ながら売れ残ってしまったら、ご自分で買い取ってお友達にプレゼント…という仕組みです。(書店に在庫をためこまず、皆さまの「推薦良書」を広くご紹介いただける。…そうになったらいいなと思っっています。店内配置等については、当店にお任せください。種類によっては、ご希望に沿えない場合もあります。

第11回：「子どもてつがくカフェ」が拾うもの

臨床心理士
坂岡 大路

1988年京都府生まれ。北海道大学大学院教育学院臨床心理学講座修士課程修了。訪問型フリースクールや、児童デイサービスなどでのボランティア経験を経て、札幌市内の児童精神科に勤務。臨床心理士、公認心理師。2019～2021年『成長』(いのちのことは社)誌に「子どもてつがく教会学校」を連載。

【副題】子どもてつがくカフェの物語

最近「子どもてつがくカフェ」(通称「てつカフェ」)を運営することになりました。

「なんでゲームはダメって言われるのに、本はいいの?」

「人類は何のために生まれてきたの?」(他の生物や地球環境を犠牲にしているのに)」「

「てつしたら苦手な相手とうまく付き合えるの?」

こうしたテーマについて、ワイワイがやがや、時に静かに語り合い、聴き合う。そんな時間をみんなで過ごすのです。「てつカフェ」をやってみると、「いろんな意見を聞いて楽しかった」という感想が毎回聞かれます。「〇〇くんが言っていたのを聞いて思ったんだけど…」と、他者の意見に触発される子、「なるほど」「確かに」と頻繁に相槌を打つ子、「話を聞いているだけだったけど、いろいろ考えられてよかった」という子、チャット欄(ZOOMの機能です)にコメントを書くだけの子もいます。どんな参加の仕方でも、ここでは尊重されるのです。

日ごろの生活でなんとなく感じている「なんで?」「気になる?」「モヤモヤ」を、遠慮なく出し合い、語り合う。やっているのはただそれだけのことです。「なんだ、そんなことだったら別にいつでもできるじゃないか」と思われるでしょうか。いえいえ、こんな場合は案外ありそうでないのです。

子どもも大人も、「まわりは何て思うだろう?」「世間からどう思われるだろう?」「先生は、大人は、上司は、何を期待しているんだろう?」「こんな発想で考えることに慣れさせすぎています。そして、自分の意志を持つことが上手くてできないのです。

職場で実習生を受け入れられていると、「あなたはどっと思っ?」という問いに上手く答えられない学生に出会います。それはその人自身のせいなのでしょうか。ひよっとすると、自分の考えをきちんと聴いてもらえる経験、安心して自己表現できる経験が乏しかっただけかもしれません。胸の奥の深いところで、自分が一体何を感じ、どう考えているのか。抑え込んでいるうちに忘れてしまう。そして、自分の感覚がわからなくなってしまうのです。

自分を抑えて、「まわり」や「みんな」のために第一に考えるというのは、一見協調性があつて素晴らしいことのように思えます。しかし、私達は思い出さなければいけません。戦前の日本は、まさに「まわりの空気」に振り回された結果、不合理極まりない戦争に突入していったのです。

「みんなのために考える」ことがダメなわけではありません。でも、「みんな」というのは、本来、「それぞれ独自の顔を持つ個人」で成り立っているはずなんです。にもかかわらず、個人の意志を抑え込んで「みんなのため」を追求した時、大変な惨事になります。一人ひとりの顔が見えない、あるいはみんな同じような顔をした「個人なき全体」が生まれる。そして、「みんなそうしているから」という理由にならない理由で、何のためだかわからない不合理な道を突き進んでしまうのです。本質的な「何のため?」が問われることのないまま、手段が自己目的化し、暴走する。これほど恐ろしいことはありません。

「キリスト教の世界でもそれと似たことが起こりやすいのではないか?」という懸念を、私は感じています。「信仰だから」「聖書」に書いてあるから。「この一言で思考停止してしまい、それ以上「何のため?」と問わなくなってしまう。「不合理なるがゆえにわれ信ず」という有名な言葉もあります。「何のため?」という合理的な理由がなくとも信じる。それこそが信仰ではないのか?そんな意見も聞こえてきそうです。

しかし、そもそも聖書を解釈し、信仰しているのは、私達人間です。サタンですら聖書を引用してイエスを誘惑しました。そう考えるなら、重要なのは「聖書を引用している」という形式ではありません。「そもそも何のために」聖書を引用しているのか。そこが大事なのです。

イエスに批判された律法学者は、ある意味でだれよりも「信仰深い」人たちだったと言えるでしょう。「安息日に働いてはならない」という戒律をかたくななまでに守り、人々を縛り付ける彼らに対し、イエスはこう問いました。

「安息日に律法で許されているのは、善を行うことか、悪を行うことか。命を救うことか、殺すことか。」(マルコ3:4)

この問いは実に「哲学的な」ものだと思います。イエスは、「そもそも律法は何のため?」と問うたのです。当時の律法学者たちは、「つしななければならぬ」「つすべきである」といった「べき論」を説くばかりで、それに適応できない(しない)人の実情を知ろうとしませんでした。神の名を借りてあなた達がやっていることは何だ?一体何のための戒律なのか?イエスはそう問いかけるのです。

法律学者が思考停止して置き去りにしたものの。それは「客観的に正しい戒律」を守らない（守れない）人々の、「個人的な実情」でした。「客観的な正しさ」では括れない「人格的な何か」。ここに鍵がありそうです。

子どもたちは「てっかフェ」で、「いろんな考え方・感じ方に触れて楽しかった」と感想を語ります。しかしどうも、「意見がちがうこと」それ自体を楽しんでいるのではなさそうです。なぜなら、ただ意見が違うだけなら、ネット上に殺伐とした対立は溢れていますし、それは決して楽しい雰囲気のものではないからです。いじめや差別においても、ちがいが「悪い」ものとして扱われており、決して肯定的に受け止められてはいません。つまり、ちがいがあるから即「よい」という風には、必ずしも結びつかないのです。

ちがいが陰悪なものにならず、受け止められるものに変わるためには、何が必要なのか。その答えの一つこそ、語り合い、聴き合う関係の中で、「個人的な理由」が見てくること、だと思います。表面的な意見の奥にある、その人のパーソナルな「顔」が見えることです。

「てっかフェ」の参加者は、自分と異なる意見がその人なりの理由（事情・文脈・動機）を持って語られること、そのストーリー性に刺激と楽しさを感じているようなのです。子どもたちが目を見開いて「ああ〜」という顔をする瞬間、その表情はこんな風に語っているように見えます。「今まで考えもしなかったけど、なるほど、そういう『事情』があったてそう思うに至ったのね。』『え〜』って「瞬思ったけど、そういう『理由』があったからなのか。」「自分の視点からは思いもよらなかったけど、あなたにはそんな世界が見えていたんだね！」

「信仰だから」「聖書に書いてあるから」の一言で思考をシャットアウトしてしまう時、そこで置き去りにされるのはこの部分だと私は思うのです。人格的な何か、パーソナルな何か、顔のある何かです。

対話の中でその人なりの人格的な理由や表情が見えてきた時、最初は「意味がわからない」と思っていた何かが解きほぐされ、時には楽しめることすらある。これは結構すごいことなんじゃないかな、と私は思います。

全体主義的でない、一人ひとりの意志が大切にされる社会は、こうした小さな関わりの積み重ねによって育まれていくのではないか…。そんなささやかな希望を、私は「てっかフェ」に見出しています。

からしだね館のついでに こころ病む人の支援



京都市東部障害者地域生活支援センター・からしだねセンター主任
武山 世里子（精神保健福祉士・相談支援専門員）

「他者や社会に対する信頼」を失ったかのように見えたSさんが、今まで恐れの対象でしかなかった「外の人間」（この時は訪問看護師）に渡した手紙とは…。

（10月号からの続きです）

Sさんの手紙

一人暮らしを望む。
これは 自分と母親の 総意。
ここに自分がいることは
自分にも母親にも良いことが全くなく
改善もできず 悪化する一方。
今現在のワクチン接種直後
というタイミングを活かしたい。
遅くとも今年中に
できるだけ早く 新しい住居を
見つけてほしい。
よろしく願います。

2021年9月 S

このように、はっきりとSさんが自分の意思を伝えてくれたのは、この時が初めてでした。

母親と2人きりの暮らしを見ると、母親がSさんを手離すことも、Sさんが母親と離れることも無理だろう、と周りの者はあきらめていました。

しかし、違ったのです。

明らかに「何かが動き始めた！」と感じました。

Sさんの決意にどう考えたか

一人暮らしを決意し、母親との決別を表明したSさん。私は早速、Sさんにふさわしいグループホーム（障害のある方の住まい。障害者数名が一つの建物に入居しているところもあれば、ワンルームタイプの部屋もある。そして、必要な時にサポートしてくれる支援者《世話人さん》がいる。）を探し始めました。強迫的な思考や行動パターンのある母親は、外部の者が持参する書類を「有害なもの」として受け取ってくれません。その思考は息子のSさんにも刷り込まれており、看護師がメモや手紙を渡しても「不潔なので」と受け取ってくれませんでした。一人暮らしの話しを具体的に進めるため、グループホームのパンフレットをラミネートし、Sさん達の目の前でアルコールで消毒することで、安心して受け取ってもらえるようにしました。それを訪問看護師に渡し、次回の訪問で渡してもらおうことになりました。

大きな壁

次の訪問時に、Sさんが一人暮らしを希望していることを母親に話しました。そのための準備として、グループホームの入居を提案しました。ラミネート加工したホームのパンフレットをアルコールで消毒して母親に見せようとすると、今まで見たことのない剣幕で（聞くに堪えない言葉で）訪問看護師を責め始めたそうです。「薬を届ける役割の看護師が、Sに何を吹き込んだのか！この家から出たいと言ったことのない息子に、一体何をしようとするのか！」その時、当のSさんは自室の扉を閉ざし、一言も声を発してくれませんでした。あまりにも母親が感情的にまくしたてるので、訪問看護師はその場を離れるしかありませんでした。母親の反対は想定していました。それでも、Sさんの決意にいつか母親が理解を示してくれると信じ、その後も訪問を重ねました。

しかし、Sさんの部屋の扉は固く閉ざされ、Sさんが姿を現すことすらなくなっていました。コロナのワクチン接種以降、Sさんと毎回の訪問で顔を合わせて話をできるようになったので、状況としては後退しているようにも感じました。何度目かの訪問でようやく、Sさんがドアの隙間から姿を見せてくれました。母親が訪問看護師とSさんとのやりとりを

監視する中で、Sさんはこう言いました。

「あれから母親と話をしたけど、「コロナもまだまだ心配なので、一人暮らしはやめておきます…。」小さな声で、目も合わせられなかったそうです。

訪問看護師はそれがSさんの本意ではない。母親がいる中では、本音を話すことはできない、と思いました。

Sさんの「Infinite」の家

たとえ、Sさん自身が、一人暮らしへの決意がゆらいでしまっても、支援をする私たちは、Sさんが再び強い思いで「この家を出たい」と言い出すのでは、という「希望」を持ち続けています。

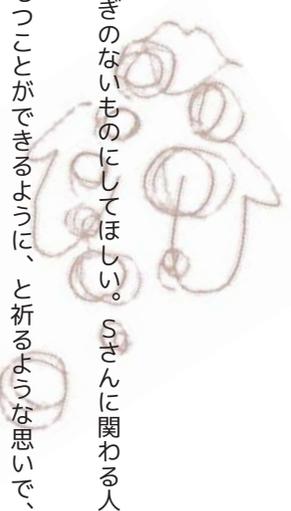
「一人暮らしを望む。」

Sさんが私たちに伝えた「ことば」は、それほどの力を持っています。

自分で自分の人生を決める経験を積み重ね、自分に対する「信頼」をゆるぎのないものにしてほしい。Sさんに関わる人たちを通して、他者や社会に対して「信頼」してみようと思っしてほしい。

いろいろなものを「喪失」してきたSさんが、この状況から「希望」をもつことができるように、と祈るような思いで、今も支援者はSさんと母親の家を訪問しています。

Sさんの「ことば」は具体的な形として実現はしていませんが、Sさんのストーリーは続きます。また、いつか、これを読んでくださったみなさまに、続きのストーリーを紹介できることを心から願っています。



からしだね館では、障害のある方の生活全般の相談を受けたり、就労支援をしてたりしています。

障害のこと、福祉のことなど「こんなことを聞かせてみたい」とSさんにあれば、ぜひ、CLICからしだね書店（clic@karashidane.or.jp）までお知らせください。



献本について お知らせ

たいへん申し訳ございませんが、
送料をご負担いただくと
ありがたいです。
書店への直接お持ち込みも
ありがたいです。

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本（多少、書き込み等があっても、大丈夫です）
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし（料理、健康、経済等）にかかわる本
- 5 小説（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）
- 6 漫画（人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません）

【本の送り先】

住所：〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館

宛先：CLC からしだね書店 献本係 電話：075-574-1001 FAX075-574-0025

Mail：clc@karashidane.or.jp

【本と一緒にいただきたいもの】

以下の内容を記入したメモ

①献本者のお名前②ご住所③電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィール、献本いただいた本の感想や思い出等を一言。⑥献本くださった方のお名前を書店だよりにご紹介させていただきたいと思えます。お名前の掲載は困るという方は、お知らせください。

【古本の売上を含むCLCからしだね書店の収益は、すべて、書店で働く障がい者の工賃になります】

【献本感謝】

岸川朗木様、兼松哲夫様、竹下八千代様、東近江キリスト教会様、入江治美・尚志様、関美佐子様、中村直美様、坂本正路様、上羽佳代子様、大兼久芳規様、青木秀次様、近藤素恵様、貝出久美子様、よつ葉ホームデリバリー京滋様、岩田和子様、福井文彦様（敬称略）

編集後記

◆早いもので、今年もあと2か月を切りました。どこのキリスト教書店でも、この時期はクリスマスや新年に向けて、カレンダー、手帳、クリスマス用品等の注文で忙しくなるようですが、からしだね書店も初めてそのお仕事をさせていただいています。◆旧CLC京都店から引き続きからしだね書店の店頭に立つ冬木さんの弟さんが、このたび本を出版されました。教会へ行くようになった経緯から伝道者になった経緯と現在に至るまでのことが、とても読みやすい「証」と写真でまとめられています。ぜひご購入ください。『“その時”主は共におられた― In his Time ハワイの風に乗せて伝えたい』（冬木友博著 1,000円（税込み）発行：株式会社ブレイズ】【店長】

編集・発行：社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援A・B型事業所からしだねワークス
からしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勧修寺東出町75 からしだね館

書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025

書店メール clc@karashidane.or.jp

CLCからしだね書店だよりの
バックナンバーはこちらから

